

重症筋無力症患者に対する就労を考慮した支援について

本島 万詩¹⁾, 阿南あゆみ²⁾

¹⁾神戸大学医学部附属病院看護部

²⁾産業医科大学産業保健学部成人・老年看護学

(2022年10月3日受付)

要旨：目的：重症筋無力症患者(MG患者)にインタビューを実施し、患者が体験する仕事上の影響や仕事に対する思い、就労に関してどのような支援を望んでいるのかを明らかにすることで、今後の看護の示唆を得ることを目的とする。

対象：研究対象者は研究の協力が得られた、就労して自立した生活を送っているMG患者11名である。

方法：MG患者が体験している症状の影響や仕事への思い、看護師に対して望んでいる支援についてどのように考えているのか半構造化インタビューを実施した。得られたデータから逐語録を作成した後、MG患者が体験する仕事への影響や、仕事への思い、看護師へ望む支援についての語りを抽出しコード化を行った。コード化した後、質的帰納的に小カテゴリー、中カテゴリー、大カテゴリーへと分類した。

結果：MG患者が体験する仕事への影響として【症状による仕事への困難】、仕事に対する思いとして【職場や同僚の病気に対する理解とサポートが必要】が抽出された。また、看護師に望む支援として【看護師からの情緒的なサポートや能動的な関わり】、【他患者の情報を含んだ生活上の注意点や工夫点の情報提供】が抽出された。

結論：MG患者は日常生活場面だけではなく就労場面でも様々な困難やつらい体験をしている。看護師は情緒的な関わりだけでなく、MG患者の仕事と治療の両立を目標に職場環境がどのような状況であるのか、早期に情報収集を行う必要がある。また、日常生活と就労は切り離すことが出来ない関係性であり、MG患者が心身共に安定した生活を過ごすことができるように支援していく必要がある。MG患者を最も近くで観察することができる病棟看護師を中心に、MG患者が体験する困難や心理状況などの情報を医師や産業医に繋ぐことで、医療従事者全体でMG患者を支援していく体制を整えていくことが必要であると考えられる。

(日職災医誌, 71: 61—66, 2023)

—キーワード—

重症筋無力症, 就労支援, 看護

1. 緒 言

労働人口の3人に1人は何らかの疾患を抱えながら就労しているとされ¹⁾, 難病を抱えながら就労している患者は約40%, 20~50歳代に限定すると約70%が就労している²⁾. 医療の進歩に伴い難病患者の就労可能性が拡大しており, 難病の特性を踏まえた就労支援の必要性が高まっている³⁾. しかし, 難病患者の就労に関して「難病就業支援マニュアル⁴⁾」や「難病のある人の雇用マニュアル⁵⁾」などが作成されているが, いずれのマニュアルも事業者や難病患者自身を対象としたものであるため, 難病

患者に対して看護師が行う就労支援については明らかではない現状である。

大曲らの調査⁶⁾では重症筋無力症(Myasthenia gravis: MG, 以下MGと略す)患者を含めた神経難病患者の主観的QOLと就労の有無には関係性があることを示唆しているが, 就労に関する具体的な考察には至っていない。また先行研究では⁷⁾, MG患者は障害者雇用枠の雇用が認められなかったこと, 雇用する側から日内変動に対する理解が得られにくいなどの経験による就労の困難さがあることを示唆しているが, 問題提起にとどまっている。以上の事から, MG患者は病気があることにより仕

表 1 研究対象者の概要

患者ID	性別	年齢	病型	病歴	職業
A	男	50歳代前半	眼筋型	2年	工場勤務員
B	男	60歳代前半	全身型	22年1カ月	システムエンジニア
C	女	40歳代後半	眼筋型	3年4カ月	薬剤師
D	男	50歳代後半	眼筋型	4年	調理補助
E	女	50歳代前半	全身型	7年1カ月	施設事務員
F	女	40歳代後半	全身型	5年6カ月	小売店販売員
G	女	40歳代前半	全身型	8年4カ月	小売店販売員
H	女	30歳代前半	全身型	4年9カ月	理学療法士
I	男	40歳代前半	全身型	6年8カ月	介護用品営業
J	男	40歳代後半	眼筋型	3年	機械器具営業
K	男	30歳代後半	全身型	8年	介護士

事にどのような影響や思いを抱いているのか、これらを踏まえて看護師に対してどのような支援を望んでいるのかを明らかにする必要があると考えた。

II. 研究目的

本研究では就労している MG 患者にインタビューを実施し、患者が体験する仕事上の影響や仕事に対する思い、就労に関してどのような支援を望んでいるのかを明らかにすることで今後の看護の示唆を得ることを目的とする。

III. 研究方法

1. 研究デザイン

本研究は MG 患者を対象に半構造化インタビューを行い、作成した逐語録をもとに内容分析を行う質的帰納的研究である。

2. 研究対象者

産業医科大学病院に通院中で就労を継続している MG 患者 15 名を対象とし、参加の同意があった対象者を研究対象者とした。なお本研究では疾患の特徴上人数に限りがあるため病型は問わずに選択を行った。

3. 調査期間

2021年4月～10月

4. 調査方法

インタビュー時間は60分を基本とし、語りに対する信頼性を高めるため研究対象者の同意を得た上でICレコーダーを使用して録音を行った。

5. 調査内容

MG 患者が体験している症状の影響や仕事への思い、看護師に対して望んでいる支援についてどの様に考えているのか半構造化インタビューを実施した。インタビューガイドは以下の通りである。

- (1) 仕事に対して感じていることについて
- (2) 復職後に困難と感じていることについて
- (3) 看護師に望む支援について

6. 分析方法

調査前にインタビュー練習を行い、分析方法について

検討を重ね信頼性の確保に努めた。調査後に逐語録を作成し、調査内容につながる文脈を抽出した。その後、質的帰納的に内容分析を実施し、コード化、カテゴリー分類を行った。分析過程では質的研究に精通した者を含む看護研究者および大学院生間で討論を重ね、妥当性の確保を行った。

7. 倫理的配慮

本研究は産業医科大学倫理委員会（受付番号：第 R2-086 号）の承認を得た上で実施した。

IV. 結 果

1. 研究対象者の概要

研究参加の同意を得た 11 名を研究対象者とした（表 1）。

2. MG 症状が仕事に与える影響

MG 症状が仕事に与える影響として 12 小カテゴリー、4 中カテゴリー、1 大カテゴリーが抽出された（表 2）。以下、大カテゴリーを【】、中カテゴリーを《 》、小カテゴリーを < >、語りを「」で示す。

1) 【症状による仕事への困難】

MG 患者は、<PC 業務が続くと複視が出てきて仕事にならない>といったモニターを見続けると支障が出る体験をしていた。それだけではなく、<二重に見える時は片眼でパソコンを使う>といった就業上の工夫も余儀なくされており、一般的に負担が少ないと言われるデスクワークでも《眼症状によるデスクワークへの支障》があることが示された。また、MG 患者は病気になったことで <子供の事もありいつまで仕事ができるのかと大分考えた>など、《仕事を続ける事への不安がある》ことを感じていた。さらに、病気に罹る前の自分と比較する傾向にあり、<色々率先して仕事をしてきた自分とのギャップがある>のように《以前と比べて思うように仕事に取り組み事が出来ない》ジレンマを抱えていた。その他にも、周囲から十分な理解がされていないと感じた経験があり、<人によっては怠けているんじゃないかという風に見る人もいる>といった《眼に見えない症状により病気を十分に理解してもらえない》と感じていた。【症状に

表2 MG 症状が仕事に与える影響

大カテゴリー	中カテゴリー	小カテゴリー
症状による仕事への困難 (n=8)	眼症状によるデスクワークへの支障 (n=5)	デスクワークでも結局眼を使うのでなかなか難しい PC業務が続くと複視が出てきて仕事にならない 二重に見える時は片眼でパソコンを使う
	仕事を続ける事への不安がある (n=4)	子供の事もありいつまで仕事ができるのかと大分考えた 診断されたときは仕事を辞めようと思っていた
	以前と比べて思うように仕事に取り 組む事が出来ない (n=4)	以前の自分と比べて、もっとできるのと思ってしまう 今までできていた仕事が出来なくなり、ちょっと取り残された感じがある 色々率先して仕事をしてきた自分とのギャップがある
	眼に見えない症状により病気を十分 に理解してもらえない (n=3)	人によっては怠けているんじゃないかという風に見る人もいる もっとできるのではないと言われて結構苦労した やはり病気の当事者にしか分からないのかなと思う時がある

表3 仕事に対する思い

大カテゴリー	中カテゴリー	小カテゴリー
職場や同僚の病気に対す る理解とサポートが必要 (n=9)	上司や産業保健スタッフとの 相談が必要 (n=4)	復帰する時点で上司と産業医を交えて話した 産業医と保健師に面談してどうやって仕事をしていけばいいのか話し合った
	職場の協力による仕事内容や 仕事量の調節が必要 (n=5)	残業なし、定時に帰る、デスクワーク等の条件付きで復帰した ゆっくりでもできるようなものを選んで仕事をしていた 勤務も連動にならないように組んでもらっている
	同僚の病気に対する理解が必要 (n=5)	会社の人たちはみんな病気について理解してくれている 見た目では症状が分からないのに理解してくれる職場なので頑張れたと思う 周囲の理解により全然負い目を感じることなく働いている
	人間関係や職場の風土が大切 (n=4)	自分を上手く受け入れてくれるような職場の風土にも助けられた 職場の環境面が大きく恵まれていたと思う 上司との関係性や一緒に働いている人の理解がポイント
	相談できる人間関係が必要 (n=3)	職場はずっと同じ人達なので色々言える環境であった 家族や上司と話して不安感は解消された 職場に難病の人がおり色々相談に乗ってくれた

よる仕事への困難】の実際の語りとしてC氏の言葉を記述する。C氏「痛みの評価が本人にしかできないというのと一緒で。そういうのがなかなか伝えられないっていうのもあるので。まあその、人によってはちょっと怠けてるんじゃないのか…ちょっとこうじゃないの、っていう風な目で見える方もいるので…」。

3. 仕事に対する思い

仕事に対する思いとして21小カテゴリー、7中カテゴリー、1大カテゴリーが抽出された(表3)。

1)【職場や同僚の病気に対する理解とサポートが必要】

MG患者は<復帰する時点で上司と産業医を交えて話した>等の経験から<上司や産業保健スタッフとの相談が必要>であると考えており、仕事内容や出勤回数の調整等の<職場の協力による仕事内容や仕事量の調節が必要>であると感じていた。職場では<会社の人たちはみんな病気について理解してくれている>といった経験から<同僚の病気に対する理解が必要>であると感じており、他にも<職場の環境面が大きく恵まれていたと思う>といった<人間関係や職場の風土が大切>であることや、<相談できる人間関係が必要>であると感じて

いた。【職場や同僚の病気に対する理解とサポートが必要】の実際の語りとしてH氏の言葉を記述する。H氏「私の場合は職場の人がホントにいい人たちばかりだから…なんですかね、午後丸まる寝てたりとか、きつくて、でも見た感じでは分かんないのに、それを凄く理解してくれるから。だから頑張れたかなって、それは思えますね…」。

4. 看護師に望む支援

看護師に望む支援として20小カテゴリー、7中カテゴリー、2大カテゴリーが分類された(表4)。

1)【看護師からの情緒的なサポートや能動的な関わり】

MG患者は<心のケアを持ちつつ接してもらえたら助かる人もいるかもしれない>など、看護師に対して<精神的なケアを意識しつつ接してもらいたい>と感じており、<看護師という存在が近くにいてくれたら安心する>といった<看護師がいることで安心感を感じたい>気持ちを抱いていた。それだけではなく、<少し話しかけてくれるだけでも安心できると思う>といった<何でもいいので看護師から声をかけてもらいたい>という看護師からの能動的な関わりを望んでいた。他にも<気に

表4 看護師に望む支援

大カテゴリー	中カテゴリー	小カテゴリー
看護師からの情緒的なサポートや能動的な関わり (n=5)	精神的なケアを意識しつつ接してもらいたい (n=2)	看護師に望むこととなると心のケアとか精神的なケアとかになる心のケアを持ちつつ接してもらえたら助かる人もいるかもしれない
	看護師がいることで安心感を感じたい (n=2)	入院中は不安だから顔を出してくれるだけで安心できる看護師という存在が近くにいってくれたら安心する
	何でもいいので看護師から声をかけてもらいたい (n=3)	少し話しかけてくれるだけでも安心できると思う 何気ない会話でいいので声をかけてもらうくらいで大きく違うと思う 何かしら声をかけてもらえたらまた自分も違ったのかなと思う
	気にかけているという姿勢を見せてほしい (n=2)	気にかけてもらえているのを実感できると凄く安心する 気にかけて声をかけてもらえるというのが一番うれしいし安心
	外来でも看護師と話せる機会が欲しい (n=2)	外来受診の後に看護師との会話を望むかどうかの選択肢はあってもいいと思う 診察で言いたいことがあっても医師には言えないという患者もいると思う 外来でも何気なく声をかけてくれたりしたら一番助かると思う
他患者の情報を含んだ生活上の注意点や工夫点の情報提供 (n=7)	退院後の生活上の工夫点や注意点を知りたい (n=4)	生活の進め方や病気との付き合い方は教えてもらいたかった 今後の生活上の工夫点を言ってもらった方が助かると思う ちょっと聞いておくだけでも後で気を付けることはできると思う
	同じ病気の人がどの様な経過を辿るのが知りたい (n=3)	同じ病気の人でも回復して退院したと看護師から何回も励まされた不安もあったが、社会復帰している人もいるという情報は希望を持たた他の人がどういう感じなのかを知りたい

かけて声をかけてもらえるというのが一番うれしいし安心>など、看護師側から<気にかけているという姿勢を見せてほしい>と感じていた。加えてMG患者は入院中のみならず、<外来受診の後に看護師との会話を望むかどうかの選択肢はあってもいいと思う>といった<外来でも看護師と話せる機会が欲しい>と感じており、看護師と継続的な関わりを持つことを望んでいた。【看護師からの情緒的なサポートや能動的な関わり】の実際の語りとしてG氏の言葉を記述する。G氏「看護師さんに望むことという、やはり心のケアとかになるんですかね、そしたら…精神的なケアだったりとかになるのかな（中略）こうやって一般的に考えたときに、この病気を持っている人に対してそういった面を持ってれば、ありがたいのかもしれないね…」。

2) 【他患者の情報を含んだ生活上の注意点や工夫点の情報提供】

MGは眼症状や筋力低下など様々な症状があることから、<生活の進め方や病気との付き合い方は教えてもらいたかった>といった<退院後の生活上の工夫点や注意点を知りたい>と感じていた。それだけでなく、<同じ病気の人でも回復して退院したと看護師から何回も励まされた>など、<同じ病気の人がどの様な経過を辿るのが知りたい>と感じており、従来の退院指導だけでなく他患者の様子も含めた情報提供を望んでいた。【他患者の情報を含んだ生活上の注意点や工夫点の情報提供】の実際の語りとしてI氏の言葉を記述する。I氏「他の人がどう感じるかですよ、知りたい情報としては（中略）…今の所、重症筋無力症の人に出会ったことないし…僕も高齢者を対象とした仕事をしてるんで、大概この10年で1,000人は多分関わってきてると思うんですけど、重症筋

無力症の人は出会った事がないので比較ができないんですよね…」。

V. 考 察

1) 仕事上の困難について

本研究でMG患者は自宅内のみならず、職場においても眼症状による困難を抱えていることが明らかとなった。看護師は負担が少ないと思われるデスクワークでもMG患者には困難があることを理解し、眼に対しても定期的な休息をとる事の大切さを伝える必要がある。またMG患者は仕事を続けることへの不安だけでなく、周囲から理解されにくい症状により一部の人からは理解が十分に得られていないと感じており、このような心理状況はMG患者にとって大きなストレスとなりうる。MG患者は仕事に復帰できるまでに症状が改善しても、残存している症状や様々なつらい体験をしているため、看護師はMG患者の置かれている状況を理解し、精神的な支えとなるような関わりを行う必要がある。

2) 仕事と治療の両立を見据えた関りについて

難病であっても無理なく仕事で活躍を続けられるためには、デスクワークや短時間勤務等の身体的負担の少ない仕事である事、通院や業務調整等についての理解・配慮のある職場であることが必要であるとされている⁹⁾。今回の調査では、主な配慮としてデスクワークへの異動に加え、通勤にならないように勤務を組んでもらうといった配慮が見受けられていた。これはMG患者特有の易疲労性を考慮した対応であると考えられ、研究対象者の多くは周囲から病気に対する理解を得ることが出来ていると考える。このような配慮により研究対象者の多くは診断前と同じ職場で働き続けることが出来ており、周囲か

らの理解とサポートが必要であると感じているのではないかと推察する。看護師は MG 患者の仕事と治療の両立を目標とし、具体的な就労状況の他、産業保健スタッフが在籍している職場であるのか等の職場環境について早期から情報収集をする事が必要である。しかし仕事を継続する事ができる要因には、単純な仕事内容の調整だけでなく人間関係などの目に見えない要因が数多くある。そのため看護師は患者と共に情報を整理し、調整が可能な部分について共有した上で、産業医などの産業保健スタッフへ情報を繋いでいく事が必要である。

3) 看護師が行う支援についての示唆について

MG 患者は病期に関わらず常に不安や困難を感じており⁸⁾、退院した後も様々な生活・就労上の困難を経験しているため、看護師側からの情緒的な関りや外来でも看護師と話せる機会が欲しいと考えているのではないかと推察する。そのため病棟・外来看護師は MG 患者との接点を増やし、会話の機会をより多く設けていく必要がある。また、MG 患者が望んでいるのは治療による副作用のみに限らず、症状による生活上の注意点や他患者の情報であることが明らかとなった。現在はインターネット等で病気や症状について調べることはできるが、症状によって実際の生活にどのような障害が起きるのかを知ることは難しい。このことから、看護師は患者が退院後に安定した生活を送ることができるために、生活・就労上の注意点を把握して伝えていくことが必要である。

以上の事から看護師は、患者への情緒的な声掛けや退院後の生活を意識した情報提供を行うなど、MG 患者が心身共に安定した生活へ繋げるための支援が望まれていると考えた。これに加え、就労上で体験している困難や心理的な負担に対するケアも必要である。そのため本研究では、日常生活と就労は切り離すことが出来ない関係性であると考え、安定した就労を実現するために心身共に安定した生活を目指した支援が必要と考える。まずは本研究で得られた知見から MG 患者がどのような困難や心理状況を経ているのかを理解し、入院や外来に関わらず MG 患者が体験する困難や不安に寄り添う事ができる環境を整える必要がある。

先行研究でも示されているように¹⁰⁾、看護師が行う就労支援は看護師間でも未だに認識が統一されていない。しかし本研究の結果から考える看護師の役割として、MG 患者との継続的な繋がりを保つことによって得ることができる個々の心理的な傾向や、患者との接点が多い看護師だからこそ気付くことができる身体症状の特徴などを把握する事が必要ではないかと考える。またこのような情報を、実際に診察する医師や就労環境の調整を行う産業医などへ伝えていき、医療従事者全体で MG 患者の生活や就労を考えた支援を行う体制を整えていくことが必要である。そのためにも MG 患者との接点が多く、情報収集できる機会に恵まれている病棟看護師は、他職

種へ情報を繋いでいくという重要な役割を担っていると考える。

VI. 結 論

1. MG 患者が体験する仕事への影響として【症状による仕事への困難】、仕事に対する思いとして【職場や同僚の病気に対する理解とサポートが必要】が抽出された。また、看護師に望む支援として【看護師からの情緒的なサポートや能動的な関わり】、【他患者の情報を含んだ生活上の注意点や工夫点の情報提供】が抽出された。

2. MG 患者は日常生活場面だけではなく就労場面でも様々な困難やつらい体験をしている。看護師は情緒的な関わりだけでなく、MG 患者の仕事と治療の両立を目標に、職場環境がどのような状況であるのか早期に情報収集を行う必要がある。

3. 日常生活と就労は切り離すことが出来ない関係性であり、MG 患者が心身共に安定した生活を過ごすことができるように支援していく事が必要である。MG 患者を最も近くで観察することができる病棟看護師を中心に、MG 患者が体験する困難や心理状況などの情報を医師や産業医に繋ぐことで、医療従事者全体で MG 患者を支援していく体制を整えていくことが必要であると考えられる。

VII. 研究の限界と今後の課題

本調査では、治療に専念している方や症状の悪化により退職している方など、現在就労していない MG 患者は調査対象外となっているため、就労していない方々の意見が集約できなかったことは本研究の限界であり、今後の課題であると考えられる。安定した生活や就労を送れるために、今後は対象を広げて研究を継続していく事が求められる。

謝辞：本研究にご協力いただきました重症筋無力症患者様に心より感謝申し上げます。

本研究は産業医科大学大学院修士学位論文の一部に加筆・修正を加えたものである。

[COI 開示] 本論文に関して開示すべき COI 状態はない

文 献

- 1) 厚生労働省：治療と職業生活の両立支援についての取り組み。 <https://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-10901000-Kenkoukyoku-Soumuka/0000213499.pdf>, (参照 2022-1-25).
- 2) 板垣ゆみ, 中山優季, 原口道子, 他：全国調査からみた指定難病患者の生活状況と医療状況 難病法施行後に指定された疾病に焦点をあてて。日難病看会誌 24：251-260, 2020.
- 3) 障害者職業総合センター編：調査研究報告書 No.126 難病の症状の程度に応じた就労困難性の実態及び就労支援のあり方に関する研究。千葉, 2015, pp 1.
- 4) 障害者職業総合センター：難病就業支援マニュアル。 <https://www.nivr.jeed.go.jp/research/kyouzai/p8ocur000000yva-att/kyouzai25-01.pdf>, (参照 2021-3-15).

- 5) 障害者職業総合センター：難病のある人の雇用管理マニュアル. <https://www.nivr.jeed.go.jp/research/kyouzai/p8ocur000000x70-att/kyouzai56.pdf>, (参照 2021-3-15).
- 6) 大曲純子, 大田明英：神経難病患者の主観的 QOL, ADL, 自己効力感の関連性. 活水論集 看護 4 : 13—22, 2017.
- 7) 仲 真人, 伊藤和弘：在宅で療養する難病患者のヘルス・ケア向上にむけて ある重症筋無力症患者のナラティブから得られた知見. 聖路加看大紀 37—44, 2009.
- 8) 本島万詩, 阿南あゆみ：重症筋無力症患者が抱える生活上の困難と疾患に対する思い. 日本職業・災害医学会誌 70 (5) : 190—195, 2022.
- 9) 障害者職業総合センター：難病のある人の就労支援活用ガイド. <https://www.nivr.jeed.go.jp/research/kyouzai/h>

- 3iskd0000002iv0-att/kyouzai68.pdf, (参照 2021-12-19).
- 10) 廣川恵子, 永石恵美, 村松百合香, 他：がん患者に対する看護師の就労支援に関する実態調査. 川崎医療福祉会誌 29 : 385—396, 2020.

別刷請求先 〒650-0017 兵庫県神戸市中央区楠町 7—5—2
神戸大学医学部附属病院看護部
本島 万詩

Reprint request:

Kazushi Motoshima
Nursing department, Kobe University Hospital, 7-5-2,
Kusunoki-cho, Chuo-ku, Kobe City, Hyogo Prefecture, 650-0017, Japan

Work-related Support for Patients with Myasthenia Gravis

Kazushi Motoshima¹⁾ and Ayumi Anan²⁾

¹⁾Nursing department, Kobe University Hospital

²⁾Department of Clinical Nursing, University of Occupational and Environmental Health, Japan

Purpose: This study aimed to obtain suggestions for future nursing care by interviewing patients with myasthenia gravis (MG) to determine the work-related effects they experience, their thoughts about their work, and the type of support they need in terms of employment.

Participants: The study participants were 11 MG patients who could cooperate in the study and were working and living independently.

Methods: Semi-structured interviews were conducted with the MG patients to determine their thoughts about the work-related effects they experience, their thoughts about their work, and the support they seek from their nurses. After a verbatim transcript of the obtained data, the patients' narratives of work-related effects, thoughts about their work, and desired support from nurses were extracted and coded. After encoding, the narratives were qualitatively and inductively classified into primary, secondary, and tertiary categories.

Results: 'Difficulties at work due to symptoms' was selected as a work-related effect experienced by MG patients, and 'compassion and support for MG patients from colleagues and the workplace is necessary' was chosen as a thought about work. Further, 'emotional support and active involvement from nurses' and 'provision of information on lifestyle precautions and innovations, including information on other patients' were extracted as support desired from nurses.

Conclusions: Patients with MG experience various difficulties not only in their daily lives but also at work. In addition to the emotional aspects, nurses need to collect information at an early stage regarding the work environments of MG patients to help them balance work and treatment. Moreover, since daily life and employment are inseparable, MG patients should be supported so that they can lead a mentally and physically stable life. It is also vital to establish a system in which all healthcare professionals assist MG patients by sharing information on the difficulties and psychological conditions experienced by such patients with doctors and industrial physicians and ward nurses at the centre, who observe these patients closely.

(JJOMT, 71: 61—66, 2023)

—Key words—

myasthenia gravis, employment support, nursing